



「運」を読む

永江 朗

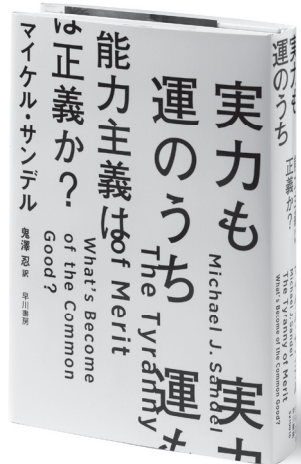
(フリーライター)

「運」をテーマにした書籍が数多く出版されている。人生指南や、社会学などのジャンルにおいて、運や偶然性は重要な切り口なのだろう。数ある「運」本の中から8冊を厳選して紹介する。

「親ガチャ」とはうまいことをいったものだ。子の人生は親で決まる。子は親を選べない。生まれた瞬間にその後の人生は決まっている。マイケル・サンデルの『実力も運のうち』(早川書房)が、常套句「運も実力のうち」をひっくり返した書名にもかかわらずさほど衝撃を与えなかったのは、運と実力と社会についての諦念が広く共有されているからかもしれない。

人気テレビ番組「ハーバード白熱教室」で知られるこの政治哲学者は、アメリカ社会が建前とする能力主義の虚構を暴く。能力(実力)さえあれば、出自に関係なく希望する職業に就き、成功して富を得られる、というのが能力主義だ。だが、能力主義の実態は世襲の貴族社会であるとサンデル先生は批判する。親が金持ちの子は有名大学に進み、高い報酬を得られる職業に就く。富と地位は世襲される。成功しなかった者が怠惰なダメ人間というわけではない。むしろ努力する機会すら与えられない人が少なくない。と考えるべきだ。機会すら奪われているのに、努力しない怠け者の烙印を押される。

なまじ能力主義の建前があるから、上級国民はその地位と富は自分の実力(能力)で手に入れたものだと思われている。ほんとうは生まれたときに高い下駄を履かせてもらったのに。そし



『実力も運のうち』
マイケル・サンデル著、鬼澤 忍訳
(早川書房、2021年)

て、意識的か無意識的にか下級国民を見下している。見下されるほうは敏感にそれを察知している。アメリカで進行する政治的分断の一つがこれだ。

成功した一パーセントは、機会は平等だと思っている。成功できなかった九九パーセントは、機会の平等などないと思っている。運がよかつたなどと軽々しくいってはいけない。

運がいい人、悪い人の違いは？

リチャード・ワイズマン『運のいい人の法則』(角川文庫)は「運のいい人、悪い人 運を鍛える四つの法則」の改題・文庫化。原題は『THE LUCK FACTOR』。著者はマジシャンから心理学

者になったという人。数百人の運のいい人と悪い人を対象にしたインタビューと実験を踏まえて書かれている。

運のいい人と悪い人がいる、というよりも自分は運がいいと思っている人と、運が悪いと思っている人がいる(ワイズマンの調査によると、運がいいと思っている人が五〇パーセント、悪いと思っている人が一四パーセント、よくも悪くもないと思っている人が三六パーセント)。そこでワイズマンは実験する。運がいいと思っている人と悪いと思っている人に宝くじを買わせるのだ。結果はどちらも同じ。

ところがこの先がこの本の読みどころ。運がいいと思っている人と悪いと思っている人とは行動に違いがある。ワイズマンは様々な実験を行う。それによって明らかになったのは、運がいいと思っている人は、積極的に行動的で身ぶりや表情も開放的。小さなチャンスを見逃さない。たとえば初対面の人に気軽に声をかけるし、声もかけられやすい。一方、運が悪いと思っている人は消極的で出会いが少ない。あるいは目の前のチャンスをみすみす逃してしまふ。

運を鍛えるには「チャンスを最大限に広げる」「虫の知らせを聞き逃さない」など四つの法則があるとワイズマンはいう。



『運のいい人の法則』
リチャード・ワイズマン著、矢野 薫訳
(角川文庫、2011年)

この続きは本誌でございー